

資料委員会 便り

ARCHIVES NEWS

第 5 号

(2018年 7月)

資料整理作業も3回目の夏を迎えました。保存全資料の約半分の整理は完全に終わり、残る資料の整理を行っています。先はまだまだ永いです。毎水曜日に5~6名のメンバーで作業は進められています。こうした中、聖公会史談会をはじめ諸会合への出席、図書館、博物館へ出向いての新資料の発掘等楽しい事も沢山あります。



会館2階の会議室のコンピューターが新機種となりました。これにより、整理済資料の閲覧が簡単に出来ます。分類された資料全目録を一覧で見たり、その中の希望する資料を検索、画面で見られます。明治20年頃のめずらしい書類、大正期の教会報も、原資料に触れることなく閲覧が出来ます。ご希望の方は資料委員にお申出ください。ご案内します。

田井先生が創立された「川越女子学院」(創立時は香蘭館と名称)。ここで使われていた教科書が、県立川越高校図書館に保存されていました。山野清二郎先生(埼玉大学名誉教授)のご紹介によるもので、10冊程の国語の教科書。女子学院の印鑑が押されていました。男子校になぜ女学校の教科書が残っていたのでしょうか。

歴史講座「改めて川越学事始め その5」が川越市南公民館で10月~11月に5回にわたり開催されます。その3回目をドウエル兄が担当され「ミス・ヘイウッドが見た明治の川越」と題し講演されます。11月7日(水)午後2時から。ウエスタ川越内、川越市南公民館講座室1・2号にて。



【保存されていた教科書】

今から120年前、初雁幼稚園、梅檀幼稚園、私立川越女子学院の創立期、教師としてお働きになった「かね先生、いそ子先生」の様子が分かってきました。この時期、4名の女性宣教師が川越で奉職されており、この方々の片腕となり活躍されました。大内いそ子(結婚して佐藤姓)さんの追悼集「在りし日を偲びて」が国立国会図書館にあり、ドウエル兄がこの書から判明した事をお書きになりました。同書にあるアプタン師の追悼文を森信幸兄が翻訳されました。お読み下さい。

梅沢かね姉や大内磯子姉、どんな人生か少々深めてきた

ドゥエル・ベアリ

2012年秋、川越市制90周年事業の1つとして、執筆者が会長である「川越・セーレム親善協会」編集・発行の「川越の海を超えた交流」という一般市民向けの歴史パンフレットを出版した。来川した川越キリスト教会の欧米宣教師婦人5人も登場する。その内の2人、ヘーウッド師とランソン師を紹介する写真。(写真1)

パンフレットを発行当時私は、1895年から2年間、田井正一師が米国サンフランシスコ市で日本聖公会ミッションの設立する事や米国社会や宗教などの様子の視察などで活躍された事の情報もなく、また梅沢姉の3年間米国留学や大内いそ子姉の保母資格取得なども紹介すべきだったが、当時はまだ情報不足だった。その後、田井師の米国視察などを2018年5月27日の川越キリスト教会宣教140年記念講演会などで紹介する機会があった。今回、梅沢姉や大内姉について最近出て来た資料やわかったことを少々紹介する。まず、2人とも来川前、立教女学校を卒業した。どんな切っ掛けで来川したかはまだ不明。

梅沢かね姉 (写真2)

愛知県三河出身で、ヘーウッド師やランソン師が1904年秋、来川した頃から1908年春まで梅沢姉が2人の世話人として同居した。また、2人の日曜学校などの子供教育活動の講師にもなった。1908年春、半年の休暇を取る予定のヘーウッド師は梅沢姉を米国ニューヨーク市にあった女子執事学校入学のために母校へ連れていき、3年後、梅沢姉は日本人第1号の卒業生になり、東京築地にあった立教女学校で教鞭を執り、副校長だったヘーウッド師の同僚になった。数年後、梅沢姉がニューヨーク市で知り会った、長年米国で神学などの勉強されていた粕倉作助兄と日本で結婚し、その後上海の関税局で作助兄は長年勤めた。(New York Training School for Deaconesses 卒業アルバム、当時の米国新聞、Spirit of Missions 米国聖公会伝道局月刊誌、基督教週報、などによる)

大内いそ子 (写真3、4)

1884年2月2日、仙台藩の藩士の次女で生まれた。ヘーウッド師やランソン師が川越で1907年設立した梅檀幼稚園の主任になる前、準備の1つとして、東京保母養成所を卒業した。梅檀幼稚園はそれより数年前の田井師の設立された宇気良幼稚園と平行に設立された。大内姉は来川の際、しばらく、幼稚園前の小杉眼科の家に月宿した。ランソン師のSpirit of Missions に載っている梅檀幼稚園紹介文に梅檀幼稚園は小学校近くと書いてある。現在の川越市中原町1丁目に小杉医院(現歯科医院)や中央小学校の両方があるので梅檀幼稚園もその辺りだったと推測出来る。1910年、佐藤権太郎氏と結婚した。その頃まで梅檀幼稚園主任は続き、ランソン師が川越を1908年に去り、田井師の初雁幼稚園と合併され、アプタン師が園長になった。

いそ子師は51才の若さでガンにより聖路加病院で1935年に逝去。翌年、夫君は2百数十ページの「在りし日を偲びて」という追悼書を自費出版した。この中にあるアプタン師の追悼文(森信幸兄の和訳をご参考に)や梅檀幼稚園生であった小杉医師の娘、千鶴子姉(東京都副知事などを務めた住田正一氏と結婚、次男の正二氏はJR東日本初代社長を務める)の文もある。ヘーウッド師やランソン師の追悼文が無いのは謎である。「在りし日を偲びて」は明治・大正頃の川越の佐藤いそ子姉を始め、その関係者などを理解する貴重資料である。(写真は次ページを参照下さい)



写真1 1907年6月、後左から：細貝邦太郎教会委員、駒野義夫伝道師、田井正一司祭、高野喜十郎教会委員、前左から：梅沢かね日曜日学校師、ヘーウッド師、大内磯子梅檀幼稚園主任、ランソン師。川越キリスト教会所蔵。



写真2 ヘーウッド師やランソン師と4つの日曜学校で教えていた梅沢かね師。Heywood, "The Sunday, Monday, and Tuesday Schools of Kawagoe Station," Spirit of Missions, 1907年4月号、332ページ。

写真3 梅檀幼稚園主任、大内いそ子師。Ranson, "The Kawagoe Kindergarten," Spirit of Missions, 1908年3月号、210ページ。



写真4 川越にあった私立梅檀幼稚園の花見。ランソン園長(右)、大内いそ子主任(推定)(左)。1907年春。Ranson, "The Kawagoe Kindergarten," Spirit of Missions, 1908年3月号、209ページ。

おちさん Ochi San

エリザベス アプタン

約30年前のことですが、私が川越に着いたその夜、おちさんは私の所に挨拶に来てくださいました。その後私はいつまでも彼女がそばにいるものと思っていました。しかし今はもうここにはいません。でもまたいつかきっと彼女といつまでも一緒にいられる時が来ると私は思っています。彼女の愛らしい雰囲気や表現の豊かさは、多くの友達に彼女の美しさを感じさせたのです。

私は彼女の名前をおおうちさんと呼ぶことができず、おちさんと呼んでしまうのできつと彼女に気を悪くさせてしまったのではないかと思います。私はかつて彼女を怒らせてしまった苦い経験があるのですが、それは礼儀作法のよしあしについて言ったことに彼女は腹を立ててしまったことです。これは私たちにとっての唯一の喧嘩でした。それ以来私は二度と彼女の礼儀作法の不平については言いませんでした。

私はどのようにしたらよいかわからないことが起きた時にはいつもおちさんに頼ることにしていました。私がアメリカに行っている間彼女は私の近親者の面倒をよく見てくれました。外国から戻り、仕事が重なりとても忙しかった時いつもいろいろ助けてくれたのが彼女でした。彼女は私の学校で先生として週に2度教える時間を持ってくれました。教員という大変な仕事でありながらも頑張ってくれました。かつて私の“危険な思想”を調べるためにやって来た刑事は、おちさんが私の妻かどうか尋ねる混乱ぶりをしていたことがありました。それでおちさんは私がひとりだということを知り、たくさんの友達を私に紹介してくれました。

彼女の誠実な愛に感謝している外国人の友達は私だけではなく、貧しい心を克服するまで彼女があらゆる方法で援助していた Mr. Jefferies という人がいました。Mlle. Martin が病気で聖ルカ病院にいた時、付き添っていたのがおちさんでした。また、私がミルウォーキーにいた時、Miss Wilson がもっとも愛情深く話しをしていたのが彼女のことでした。おちさんのそのような愛情ある話はどこにいても耳にしたのです。

彼女は私が大変な手術をしたことを知った時、そばにいて元気づけてくれました。その後10日後に彼女もがんの検査を受けましたが、残念ながら手術を受けなければならないことになりました。手術後彼女は私の気持ちを察して「私は怖くはありません。神様がなさることは何であれ正しいのです。子どもたちは今やみんな大きくなり、もはや私を必要としていません。大丈夫です。」と言って、お互いに励まし合い、二人の気持ちを寄せ合いました。

私の体が良くなるにつれて彼女も回復していることは当然のことだと思っていましたが、その後、聖ルカ病院にいる彼女宛の電報を見て衝撃を受けました。しかし、彼女の信仰は変わることはないものでありました。最後の訪問の時、私は彼女に Oxford Groups のことを話題にし、私は彼女に、それは神の愛と赦しを新たらしくし、再び生かされるのだと言いました。すると彼女の顔に涙が流れました。それから私は彼女に気が楽になるような話しをしたので、彼女は自ら悲しまないように努めて陽気に笑いました。それは私が彼女と話した最後の時でした。

彼女は自己本位でない誠実さの中に、また愛と奉仕の中に表された深い静かな信仰を持った人でした。彼女は子どもたちに最も愛すべき遺産、つまり彼女自身が得た高い理想の遺産を残したのです。

*1 ページにまとめるために、要約しました。(アンブローズ森 信幸)